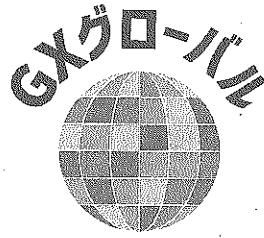


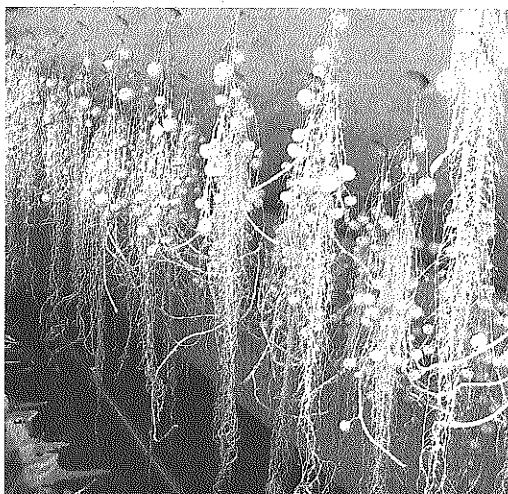


ジャガイモを増産するため、空中で種芋やその原種を栽培するエアロポニックスの導入が、中国などで広がっている。日本でも研究開発が進めば、高品質のジャガイモを短期間で増産する技術として普及するかもしれません。



空中栽培の普及加速

宮城大学特任教授 石井勇人氏



エアロポニックスで増殖中のジャガイモの種芋
(ピーター・ファンデ・ザンゲWPC会長提供)

い。
エアロポニックスは、養液を含む微細なミスト(霧)で満たし、空間に、根の部分を

つり下げて増殖させる。根を養液に漬ける

水耕栽培と異なり、空気露出するため、酸素を直接取り入れるこ

ジャガイモ増産狙う



水面には抜けた草が確
できる

アイガモロバ

■水位は5~10cm

■苗の活着する日
安に投入

■1日の使用時間
までが目安

は、導入が広がる背景を、販売から3年目で認知が進んできたことや、モデルエンジニアの魅力が上がったと分析。旧型より価格を抑え、希望小

円。農家から、抑草効果や使い方が簡単だと評価されている。一方、植えた苗が抜けないか心配の声もあり、「(苗の活着する)田植え3~5日後を目安に投入してほしい」。

とで根が活性化する。煙や水槽が不要で、土や水を介した病原菌の侵入を避けられ、ウイルスフリーの健全で高品質の種芋の原種や原原種を高速で増殖できる。その種芋が配布されれば、品種の管理や生産の効率化が進むだけなく、品質のばらつきが抑制され、流通の円滑化も期待できる。

中国では、2008年の四川大地震で壊滅的な打撃を受けた産地地を再生するため、被災

地に種芋を短期間で供給できる技術としてエアロポニックスが注目された。世界銀行からの資金援助と国際ボランティア会議(WPC)など

の技術支援により研究が加速し、種芋の増殖速度と生産量が向上。病気に強く、土壤を健全に保ち、水を節約し、生産効率が向上することから、アフリカなど中国以外のジャガイモ産地でも、実用化が進んでいる。日本では、ジャガイモは野菜(根菜)として扱われているが、海外では主食としての側面があり、ジャガイモの増産技術への期待が強い。

ただ、ジャガイモは要性を指摘した。

10月に中国山東省で開かれた「第15回中国ジャガイモ博覧会」でエアロポニックスを紹介したピーター・ファンデ・ザンゲWPC会長は「異常気象の影響でジャガイモの生産は国際的に不安定になつており、主産地でさえ供給不足の恐れがある。日本でも不足するかもしない。日本の栽培技術は優れているが、目立たない」と、収量を増やす技術の重

高温や乾燥に弱く、冷涼な地域が栽培適地だ。地球温暖化の影響で収量が低下する恐れがあり、干ばつや洪水の被害も増えている。